

PART

3



HRI Inclusive Design Workshop

Opening :

Facilitator

塩瀬隆之 京都大学総合博物館 准教授



「活動量計でワークショップを」という依頼をいただいたとき、まず「活動量ってなんだ?」と思いました。これまで生きてきたなかで、「活動量!」って叫んだことって延べ10回くらいしかないのではないかと。テレビなら、家のなかのどこに置けばいいかをみんなが知っていますが、活動量計が家に来たとき、まずどこに置こうか悩んだわけです(笑)。ですから、活動量計をデザインする以前に、まず活動量を計るってことをデザインしなければ、どこに置いてよいのかも分からない。

今回は、普段持ち歩くのにどのポケットに入れればいいのかと僕自身が悩んだことを出発点に、『活動量計をデザインする』ではなく、『活動量を計る』をデザインする』をテーマにしました。僕はインクルーシブデザインを通じて行動をデザインしようと思っていますので、できるだけモノは後回しにして、行為が生まれることを前提にしたいと考えています。その意味では、ひっそりと隠れるようなハードウェアができてよいのではないかと。結果として、みなさんの日常の行動のなかに活動量計がうまく入る、というような流れにできればと思っています。



Workshop Program :

日時 / 2012年2月3日 会場 / 京都大学 吉田泉殿



まず、できるだけ知らない人同士で、ABCの3つのグループをつくりましょう。前半の2セッションは、企業向けに行っている「クリエイティブデザインワークショップ」にならって、「ことばをさがす」と「アイデアをひろげる」という2つの作業をやります。

その後の「インクルーシブデザインワークショップ」の「みる」「かんがえる」「つくる」「みせる」では、妊婦さんと主婦、それから忘れっぽい研究者(笑)という3名のリードユーザーの行動を観察します。今回は和風の家のなかでの生活シーンをイメージして、それぞれのユーザーの行動を観察し、たくさん質問します。その後、すぐにアイデアを考えて、絵に描きます。

次に、100均ショップに行き、アイデアの実現に必要な材料を買ってきて試作品をつくります。このワークショップではモノづくりを重要視していますので、実寸大の模型みたいにするのが重要です。ラフなイメージでも、とにかくつくることを目標にします。

最後に、それぞれのグループがプレゼンテーションを行います。大事なものは、かたちを含めて相手に伝えるときに、どんな言葉だったら届くかを探っていくことです。デザイナーやエンジニアの言語だけでは他の人に伝わりませんし、ここには健康機器メーカーに勤めていない人もいますから、みんなで言葉をつくるということがすごく大事だと思います。僕は、最後にできるのは言葉だと思っています。そのことを、1日のワークショップを通じて体験していただきたいと思います。

クリエイティブデザインワークショップ

I : ことばをさがす 10:00 ~ 11:00

II : アイデアをひろげる 11:00 ~ 12:00

インクルーシブデザインワークショップ

III : みる 13:00 ~ 14:00

IV : かんがえる 14:00 ~ 15:00

V : つくる 15:00 ~ 16:00

VI : みせる 16:00 ~ 16:30

Members :

Group A



Miwa Kawamoto
川元 美和さん
リードユーザー



Yuzo Okano
岡野 祐三さん
オムロン株式会社
エレクトロニクス&メカニカルコンポーネンツ
ビジネスカンパニー
マーケティングセンタ



Tsuyoshi Yoshizawa
吉澤 剛さん
京都大学



Yoko Shimose
下瀬 陽子さん
オムロンヘルスケア株式会社
商品事業企画部 プロダクトマネージャー



Keitaro Kuno
久野 桂太朗さん
東京大学

Group B



Ayako Shimamura
島村 綾子さん
リードユーザー



Kosuke Inoue
井上 皓介さん
オムロンヘルスケア株式会社
デザインコミュニケーション部
デザイナー



Takanori Narihara
成原 隆訓さん
京都大学



Reiko Nishimura
西村 玲子さん
オムロン株式会社
知的財産センタ 企画室

Group C



Eri Mizumachi
水町 衣里さん
リードユーザー
京都大学物質-細胞統合システム拠点
科学コミュニケーショングループ
研究員



Yosuke Imanishi
今西 洋介さん
オムロン株式会社
技術本部 企画室



Satsuki Suto
周藤 沙月さん
京都大学



Masaru Kaizaki
貝崎 勝さん
オムロン株式会社
環境事業推進本部



ことばをさがす I

作業

- 1 まずは「活動量」という言葉を使わずに、「活動量ってなんだ」というコトを考えて付箋に書いてみましょう。5つくらい書いたら、スケッチブックに貼って、みんなで共有します。
- 2 次に、加速度センサーで動く活動量計では計れそうもないコトを考えてみましょう。熟睡度とか座禅具合とか、親密度を計るとか。活動量計では計れないだろうというコトを考えてみると、逆に活動量として計れるコトが見えてきます。この1時間は、活動量の周りがある言葉をたくさん出しながら、「この辺はズレてんな」「このあたりは一緒なんじゃないの」とか、言葉使いのズレ具合を計ることが大事です。
- 3 活動量計では計れそうもないコトをグループのなかで共有しながら、できなさそうなコトのなかでも、「これができたらいいよね、分かるとうれしいよね」というコトを探していきます。
- 4 最後に、「活動量を計るとはどういうことか」についてまとめます。活動量がなすべきこと、活動量計のミッション、活動量を計ることでなにを求めているのかを、ひとり2枚ずつくらいにまとめ、さらに、「こういうコトが計れればうれしい!」という具体例を見つけます。



発表

グループA: たとえば健康とか、自分が達成したいゴールに向かうためのコーチのような存在。自分が辿った経過が頑張っている証であり、具体的な数字として見せてくれることによって、気持ちが促進され、頑張りが長持ちする。その結果、自分が目標とするゴールにつながっていく。自分の目標に達するためのコーチの役割が活動量計。具体的に計りたいのは、ネットやパソコンを使った量、家事など小さな動き、付いた筋肉の量、動いた量に応じた食べてもよい量など。

グループB: 自分の理想の姿に近づきながら、日々の豊かさが増すような方法を楽しみたいし、ポジティブになるための情報をゲットしたい。自分のアウトプットを自分を表現するツールとして使いたい。具体的に計りたいのは、脳の動きや笑った回数、怒ったり泣いたりしたコト、人と話したり喋ったりしたコトとか。

グループC: 目標に向かって頑張るためにはモチベーションを維持しなければいけない。モチベーションを計るための道具が活動量計ではないか。いまの活動量計では運動量しか計れないが、自分の感情や人とのつながりが計れるようになれば、モチベーションにつながる。具体的に計りたいのは、会話、うれしいとか楽しいといった感情の起伏など。

まとめ

みなさんが辿り着いた言葉にはモチベーションとかポジティブとか、プラスの言葉が多く、それらは健康や長生き、豊かだという言葉に結び付いている。コーチという言葉や長く見守る、自分の表現ツールという言葉もおもしろかった。頑張ってる証という言葉もありましたが、数値には表れない頑張りの部分をどう見守るか。人とのつながりとかコミュニケーションの部分も大事で、活動は必ずしも運動だけではなくて、人とかかわることも活動ではないのか。喋ったことが計られていなかったりするとモチベーションを下げることになりそうですし、それは活動量計がいちばんやってはいけないことかもしれません。

今日のアウトプットは、いまみんなで考えたことを目標にしたいと思います。



アイデアをひろげる II

作業①

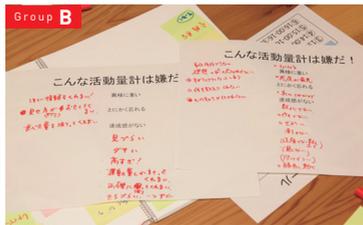
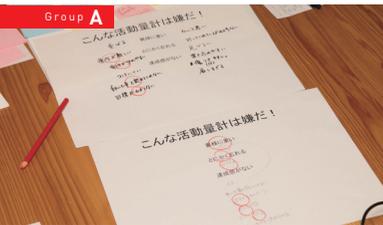
はじめに、「こんな活動量計は嫌だ」をそれぞれが10個くらいあげていきます。素直に発想したり、Iの「ことばをさがす」で考えた活動量計のミッションを逆転させ、たとえば「モチベーションを折るような活動量計」といった視点からも考えてみましょう。

発表

グループA：操作がむずかしい、電池が切れやすい、動いたことを認めてくれない、目標が分からない、異様に重いかかさばる、とにかく忘れる、なくなりやすい、ダサい(古臭い)、ケチをつけてくる、やさしすぎる

グループB：勝手になくなる、感度が最悪、家にしか置けない、何も出ない、デカイ、勝手に動く、ネガティブになってしまう、何も教えてくれない、心の動きが計れない、見せ方がおもしろくない(平凡)

グループC：持ちにくい、情報を得るのに時間がかかる、指示がワンパターン、とにかく忘れる、情報が洩れる、失くしやすい、電池が切れやすくデータがすぐとんでしまう、人に見せられないくらいダサい、ヤル気を下げる、指示がうるさすぎる



作業②

次に、「嫌な活動量計ではないモノ」を考えてみましょう。たとえば、「操作がむずかしい」ということであれば、「操作がカンタン」でもいいし、「操作はワンボタンで〜」「ボタンを押さずに〜」とか、素直に考えたことを左側に書いてください。



作業③

作業②では「こんな活動量計は嫌だを打ち消すモノ」を考えてもらいましたが、今度は逆に、「最悪だ」といったモノ」を機能として残し、それを生かすような機能に変えてください。最悪なことを正当化するように、理由のほうを変える。たとえば「自分の情報が洩れる」について、洩れないようにセキュリティを高めることも大事ですが、逆に「情報を洩らすサービス」はどうか？ 自分の意思にかかわらず情報が洩れていくことがどう嬉しいのかを説明する。最悪を正当化する理由を考えてください。

作業④

最後に、素直な発想で出したモノと逆転の発想で出したモノを全部含めて、「これおもしろいな」「こんなんできたらうれしいな」というモノ5つに丸を付けてください。後ほど100均で材料を買ってきて、丸を付けたアイデアを生かして試作品をつくっていただきます。





みる III

今度は、妊婦さんが自分なりに一生懸命頑張っていると考えるような小さな活動を全部計るには、どこにポイントを置けばいいかといった具体的な内容について話をしてもらいます。まずは、妊婦さんと主婦、忘れっぽい研究者の3名のリードユーザーに、まるでこの家のなかで生活をしているかのような行動をしてもらい、それをグループのみんなで観察します。

これまでは、1万歩歩くことだけがことさらに健康のための活動だと定義されてしまっていた。しかし、午前中にみんなで見つけたように、活動量を計ることで満たすべきミッションとは、モチベーションや健康につながることであったり、コーチのような見守る存在である。そのことをふまえて、アイデアを付箋にどんどん書いていって、午前中に考えたこととマージして、2時からは、こういうデザインにしようとか、考える作業に進みます。2時40分くらいには買い出し組が出発します。つくりながら、プレゼンのシナリオも考えてもらって、最後に魅力的な商品、サービスとしてプレゼンしてもらいたいと思います。

グループA

- Q** 安定期だと、お医者さんから「運動してください」といわれますよね。
A 激しい運動はできませんから。実際に動く範囲というのは、家のなかで掃除や洗濯をするくらいですし、家も狭いので活動量計の歩数にカウントされていなかったりで(笑)。

Q ふだん料理するとき、椅子に座ったりしないんですか？

- A** 座らないですね。こうやってうろろろして、料理して、疲れたら座ってお茶飲んでって。うちの台所はもっと狭くて、冷蔵庫も食器戸棚も近くにあるんですけど(笑)。でも、流しの下に入っているものを取るのもけっこう大変で。そういう活動を応援してもらえるといいですね。



グループB

Q 午前中の家事は、どのような内容ですか？

- A** 朝起きて、主人を起こして、朝ごはんをつくって、お皿を片付けて、お洗濯をして、お風呂の掃除をしてという感じでしょうか。

Q 買い物はスーパーでまとめ買いとかですか？

- A** まとめ買いはあんまりしないですね。毎日動きたいという意識があるからか、毎日とか、2日に一辺は買い物に出掛けます。

Q 雨が降ったら出掛けるのをやめようということはありませんか？

- A** あんまりそういうことはないですね。



グループC

Q 活動量計の通信トレイを常に持ち歩くのは面倒じゃないですか？

- A** そうですねえ。今日はトレイを持ってこなかったんですが、来ればいっぱいあるだろうと思って(笑)。ひとつに集約されたいと思いますけど。

Q 問題は、忘れちゃうってことですよね。たとえば僕の場合、眼鏡は寝るときにははずさないとか

- A** 分散かなあ？ 自分の好きなモノのなかに入れられたらいいですかね。IDカードとかはいつも持ち歩かないといけなから…。平日、大学に行くときだったら、分散させなくても、ずっとIDで大丈夫。でも、そうすると、平日と休日を合算してくれるなにかが要るかも…。



考える IV

いまから1時間くらいアイデア出しをしますが、30分後には100均への買い出し組が出掛けます。そのときに、「アレとコレを買ってきてね」といえるように考えを詰めていってください。アイデアにしていく上で大事なのは、リードユーザーと一緒に見た生活の具体的な場面をしっかりとスタート地点にすること。この場面はコレで解決しよう、あの場面はアレで解決しようということで、ちょっとした絵を描いたりしながら、どんどんアイデアを引き出してください。

もうひとつ、午前中にみんなで考えたこと、「活動量を計るとは」がなすべきこと——モチベーションを上げるとかポジティブとか、豊かとか、そういう目標を軸にしていく。具体的な場面からスタートして、軸にすべきことを忘れずにつくるようにしてください。サービスのシナリオとキャッチフレーズも考えながら、とがったアイデアをつくってください。



買い出し

つくる V



Group A



Group B



Group C

病院の看護師さんとワークショップをしたときのテーマは「転びにくいスリッパをデザインする」というものでした。病院のなかでは「この患者さんはよく転ぶので気をつけてあげてね」「はい、分かりました」というような申し送りが行われます。それで、100均でスリッパをたくさん買ってきて、実際に転びにくいスリッパをみんなで作ってみたいわけ。あるグループは、「この患者さんはよく滑って転ぶから」ということでスリッパの裏に「スペラース」を貼ったのですが、別のグループは「この人はよく躓く」ということで「カグスパール」を貼りました。また別のグループは、スリッパのふちに蓄光テープを貼りました。夜中にベッドから起き上がるときに、暗いのでなかなかスリッパが探せなくて、そうしているうちに転んでしまうからだといいます。

ひと口に転ぶといっても、滑って転ぶこともあれば、躓いて転ぶこともありますから、転び方にもいろいろある。「転ぶから気をつけてあげてね」といわれて「はい、分かりました」と、日常会話としては成立したように見えるわけですが、実はそれぞれがイメージしているモノは違う。実際に目の前でつくってみると、私たちが話していた言葉が実はズレていたことに気付くわけです。ここでは、それを実際にやっていただきたいと思います。

先ほど考えたシナリオを基にして、実際に使われる場面を想定して、「かくあるべき」というそもそものミッションを思い出しながら試作品をつくってください。また、最後のプレゼンテーションで、だれがどう話すかも考えていきましょう。



みせる VI

それぞれのグループごとにプレゼンテーションを行います。それぞれのリードユーザーが抱えている悩みや課題について、ようなアイデアで解決するのかを、みんなに届く言葉で伝えてください。

グループAのプレゼンテーション

コンセプトは「Our First OMRON」。リードユーザーは妊婦さんです。妊婦さんが出産を控えて活動量計を使う場合と、出産をして子どもを育てるときという2つのシーンに分け、最初は妊婦さん役とそれを解決する営業さん役、次に育児をしているご主人と彼の悩みを解決してくれる営業さん役というかたちで進めていきます。

妊婦さん 「安定期に入ったので動いてください」といわれたので活動計を買ったのですが、うまく計られているかどうか不安です。

営業さん 歩数にカウントされない小さな動きも捉えるように考えました。妊婦さんは腰をあまり動かさませんから、動くのは太ももや膝から下という点に注目して、膝下など肌に直接付けるプロトタイプをつくりました。センサーがクリップになっており、腹巻きや靴下に付けたり、髪に挟んだりもできます。

妊婦さん どんな運動を、どのくらいしたらいいかが分からないのですが。

営業さん 一定のペースで運動ができる「修造くん」というコーチ機能を設けました。このトレイでは活動量計の充電ができたり、データの表示もできますが、毎日の運動をサポートすると「修造くん」がお怒りになり、頑張っていれば応援してくれます。また、活動量計を忘れると「プブプ〜」と鳴ったり、携帯に「忘れてます」メールを送ってくれたりするドッキングステーションになっています。

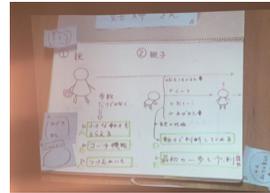
ご主人 子どもが生まれて大変。おっぱいをあげたりミルクをあげたり、家内が記録を付けているんだけど、付け忘れるし、どうにかならないですかね。

営業さん おむつを替える動きやミルクをあげる動きを感知して、記録し、可視化するセンサーを開発しました。

ご主人 単身赴任するかもしれない、この子が初めて歩く瞬間に立ち会えないのではないかと心配なんです。

営業さん 赤ちゃんが立ち上がるまでの周期的な運動データを集積すれば、来月のこの辺りに立ち上がるという予測を出すことができます。赤ちゃんの足に巻き付けていただくと、おむつを替えている動作やおっぱいを飲んでいる動きをセンサーが感知して、第1歩を踏み出すときには、これが歩数計となって、「1」とカウントされます。

ご主人 これで僕は世紀の瞬間に立ち会えるんですね(笑)。



講評

妊婦さんや主婦の小さな活動をちゃんと拾いたいというのが第1の提案。それから、厳しくもあり優しくもあり、見守ってくれる存在としてコーチが具現化しました。次に子育てのステージに移って、寝返りとかハイハイを計ることができれば、最初の1歩が計れるのではないかとという提案に結びつきました。妊婦さんから赤ちゃんの第一歩までをターゲットにしたなら素敵なものができるかもしれません。

活動量を計るのは、モチベーションを上げることであり、健康のためだったわけですが、すべての原点として、「人生最初の1歩」を価値あるモノとして計れるようになれば本当にすばらしいと思います。



みせる VI

グループBのプレゼンテーション

キャッチフレーズは「主婦魂」です。1日の行動、タスクはある程度決まっていますが、いかに効率良く家事をこなしていくかにやりがいを感じていて、他人から認められたいとか、褒められたいという気持ちがありました。

そうしたお話から、「活動量を計る」ということは、自己表現によって自分の日常のなかで豊かさを感じることはないかと考えました。

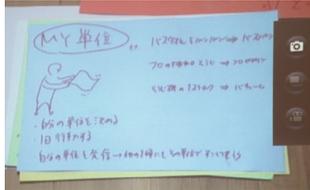
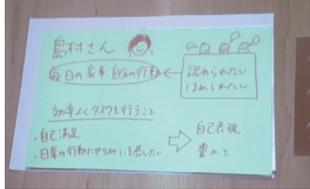
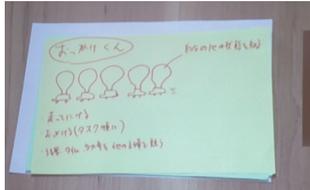
2つのアイデアを紹介します。1つ目は自動車の屋根に風船が付いた「追っかけくん」です。島村さんは指輪をしていらっしゃいますので、指輪にセンサーを仕込んで活動量やカロリー、心拍や体温を計ります。「追っかけくん」がデータを取り込み、島村さんの気持ちを表現してくれます。たとえば、ご主人の朝ごはんをつくっているとき、前日と比較して時間に余裕があれば、「追っかけくん」の風船は丸いかたちのままで色もブルーです。出勤の時間が近づくと、風船のかたちがいびつになって、オレンジ色に変化します。「追っかけくん」は次の予定を感知するとともに、島村さんの気持ちを表現してくれるわけです。

「追っかけくん」は家のなかを走り回って、掃除や洗濯、風呂掃除など、島村さんが前日と比較してどれだけ早く、効率よくスケジュールをこなしたかを表現してくれます。結果はネットにアップされて、他の主婦たちと、だれがどのようなタイムラインでどれだけ効率良く家事をこなしたかを共有することができます。

2つ目のアイデアは「マイ単位」です。たとえば、バスタオルを干すときに「バスバン」とやりますが、その行動で消費するカロリーを機械に覚え込ませます。それをたとえば「バスバン」と名付け、島村さんオリジナルの行動単位として1日の活動量を計算します。その結果をネットにアップすると、「バスバン」に興味を持った別の主婦が「バスバン」単位をダウンロードして、今度はその主婦が「バスバン」単位で1日の活動量を計ります。そうなっていけば、島村さんが発信した行動が他の主婦にも反映され、同じ基準で

活動量を比較することができます。自分の工夫や努力を発信しながら、満足感や達成感、日々の豊かさを感じることができるのではないのでしょうか。

主婦仲間だけでなく、ご主人にもこれくらい「がんばってるんだ」というのが伝わる仕組みが重要だと思います。



講評

午前中に自己表現というコンセプトが出ましたが、しっかり入っています。現状の活動量計は歩数やカロリーをカウントしますが、主婦が効率よく動きたいというと、センサで計ることのできる活動量は減るかもしれません。量が減っているのに頑張っているところを見せたいという競争環境を用意することができますごくおもしろいと思います。

また、「バスバン」という単位を生み出して、ネットワークに自分の発見を示そうというのもおもしろい。主婦の活動がきちんと把握される単位ができることはすばらしいことだと思います。



みせる VI

グループCのプレゼンテーション

スボラだし、ダイエットや健康といったモチベーションがあるわけでもないから活動量計をよく忘れる。そういう人が活動量計を持ち歩くにはどうしたらよいかをみんなで考えました。

まず、自宅から自転車置き場までは家のカギが計ってくれます。自転車に乗っているときは、自転車のカギが自転車モードで計ってくれる。自転車を降りて電車に乗るときは、家のカギも自転車のカギも鞆のポケットに入れます。そうすると、ポケットのなかでカギ同士でデータのやりとりをしてくれる。

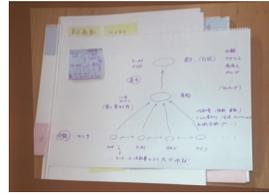
駅で電車を待っているあいだ、携帯で朝の活動量がチェックできて、大学に着いたら、今度はIDカードの裏に付いている機器がずっと計ってくれる。帰りは、IDカードを鞆のポケットに入れて電車に乗るので、またヒソヒソとやり取りしてくれる(笑)。帰宅すると、家のなかにはセンサーが張り巡らしてあるので、近くを通ったら計ってくれと信じます。キャッチフレーズは「ZBR」、スボラです(笑)。

たとえば自転車に乗っているときはカギ、待ち合わせしているときは名刺や携帯とか、アイテムの組み合わせによって行動が変わるので、その組み合わせで、どういった活動をどれくらいの割合でやっているのかをグラフで示し、携帯などに表示できるようにします。また、イチロー選手の活動量と自分の活動量を比較できるとか、同じ年代同士で自分がどれくらいの位置にいるのか、あるいは同じ地域内でどれくらいの位置にいるのかを表示できるとおもしろい。

「お知らせ画面」があって、「昼食前にこれだけ活動をしたので、これくらいカロリーを摂取したらい」と教えてくれたり、寝る前に1日にどれくらい活動したかの分が分かるとか、誕生日などに去年の自分と今年の比較ができたりするとモチベーションアップにつながる。

モチベーションアップの仕掛けとしてシールを活用します。頑張り度合いによって、目標に近づいたり、ランキングで上位になったら金のシールやキャラクターのシールがもらえる。シールを貼っていると、周りから「おっ、あの人、金までいっている」といわれたりして、モチベーションを高めていきます。

カギやID、あるいは携帯や手帳など、普段持ち歩くモノにセンサーを分散させることで、忘れても計れるようにする。また、それらが相互に通信すれば、集約して表示するのは携帯やスマホ、パソコンでもいいと思います。



講評

「忘れた人が悪い」というところをデザインでどう補うか。スボラとっていましたが、特にスボラなわけではなくて、多分みんな忘れると思うんですね。付属のトレイの上にきちんと置いて「忘れずに持って出掛けるぞ」とマニュアル通りの動きをする人がどれくらいいるかということ、ほとんどの人がスボラ側に回るでしょう。

センサーを増やし、どれか1個持っていさえすれば計り続けられる。あるいは、家のなかにセンサーを張り巡らせ、クロスポイントで集約するというような目配りをすれば、どんな人でも計れるようになるでしょう。

データをいつ見るかを考えたときに、毎日こまめにチェックする人ばかりではないでしょうから、誕生日や記念日に送ってくるというのもいいですね。

プレゼンテーションを聞いて：小池 禎（オムロンヘルスケア株式会社 デザインコミュニケーション部 部長）

僕は京都マラソンに出るため、土日に25キロくらい走っています。歩数が5万歩、活動量が5,000キロカロリーくらいになって、「オムウォーク」にデータをアップすると突然1番になります。それは僕がメタボで、90キロ弱も体重があるからです(笑)。

マラソンランナーは、42.195キロを1,700キロカロリーくらいで走るといいます。つまり、活動量が少ないほど、効率的に走りきっているわけです。僕の5,000カロリーって一体何なのか(笑)。歩数であれば、人よりも余計歩くことが価値みたいな感じもあったのですが、僕が体重を減らしていけば必ず活動量は減っていくはずですから、活動量の目標って何なのだろうと思いつつ、現在もその答えを模索しているところです。

プレゼンテーションを拝見しましたが、みなさんお上手で本当にびっくりしました。まず、活動しているのに対してくれないというお話がありましたが、どれだけ微細な活動まできちんと拾っていくかは技術研究でも非常に重要なエリアだと思っています。また、赤ちゃんが初めて立ち上がったとき、あるいは京都マラソンに出たときでもよいですが、特別な日の記録が残るというのは大変意味のあることで、生活におけるイベントという観点も非常に面白く感じました。

ウェルネスリンク（オムロンの健康管理サイト）のユーザーが10万人を超えましたが、100万人になればもっとおもしろくなると思います。お話のなかでもお互いの活動量を比較するということがありました。何らかの情報交換をすると楽しさがどんどん広がっていくと思います。

また、活動量が多いほうがいいのではなくて、効率的なほうがいいというお話もありましたし、気持ちや感情というキーワードも非常に興味深いと思いました。実現するのはむずかしい技術もあるでしょうが、いただいたアイデアを商品開発に役立させていきたいと考えています。



ワークショップを終えて：塩瀬隆之

午前中の「ことばをさがす」では、活動量計を使うことによって、健康で長生きするためにモチベーションを上げたり、ポジティブになったり、生活が豊かになればいいという話になりました。活動量計のミッションがそういうところにあるとすれば、計られていると思っていたコトが計られていなかったとか、活動量計を使った人をつかりさせることがいっばんよくないことかもしれません。をつかりさせないようにつくり変えられると、いまのシステムはもっと生きるだろうと思います。

それから、マニュアルに書かれているように、パソコンの横のトレイに活動量計を置き、毎朝忘れずに持って出掛けるという人は多くないでしょう。ウェルネスリンクのユーザーを増やすためにも、デザインとしてもう少しインクルーシブなところ、いろいろな人を巻き込めるようなデザインがあればよいと思います。



プレゼンテーションのなかで、僕がすぐに欲しいと思ったのが、「Our First OMRON」です。僕自身、自分の歩数が1,000歩であっても5,000歩であっても、あまりモチベーションは上がらなかったのですが、この小さな機械で、赤ちゃんが初めて歩いた記念すべき一歩を捉えることができるのなら、それはすばらしいこと。高いセンサー技術を誇る会社として、個人の生活における大切な一歩を計れる製品をつくっていただくと、みんながハッピーになれるのではないかと思います。

今日はお付き合いをいただきましてありがとうございました。

